

誠実さを貫いた人

—— 讃岐 和家 教授 ——

教育研究所長 中野 照海

讃岐先生は、ICUに38年間ご勤務になられました。この3月末日をもってご退職になられます。巻頭の略歴に見られますように、旧制東京大学文学部、同大学院から28歳でICUにご着任になってから、65歳までお勤めになられました。私が教育研究所に入れて頂いたのが、1956年のことですから、讃岐先生とのご交際は、36年間ということになります。この36年間は、今から振り返ってみますと、長いようでもあり、瞬時の間のようにも思われます。私が着任して間もない頃、当時西野の近くに住んでいらっしゃるころへお邪魔しました。これが、個人的なおつきあいの始まりだったと覚えています。そのときの印象では、旧制の哲学学徒といった趣きでしたが、35年を経た今日でも、この趣は先生の中に色濃く残っています。

専門が異なっていたということから、共同研究などでご一緒ということはありませんでしたが、1966年から67年まで、さらに1970年から72年まで、2度に渡って学生部長をお務めになったとき、頻繁にご一緒させて頂きました。このいずれの時期も、わが国でも諸外国でも大学紛争が起こり、高等教育の歴史の中で、もっとも困難な時代でした。ICUも例外ではなく、紛争は激烈を極めました。この時期に学生部長をお務めになったということは、想像を超える困難さといった通常の表現では表されないような、大学の存立を賭けるほどの深刻な問題に直面されました。先の時期には、私は学生委員であり、後の時期には学長補佐でありましたので、その間の讃岐先生のご苦勞は身近に見ておりました。他人ごしとでないという思いもありました。活動家

学生に、しばしば包囲されるというような状況もありましたが、決して逃げることをされませんでした。そして、忍耐強く、独特の交渉力で、大学の危機的状況の解決に当たられました。当時の交渉の様子を拝見しておりますと、かりそめな発言はしない、確固とした態度を貫いておられました。学生に対して、甘い言辭を弄して、その場を切り抜けるというような姑息な方法は、ついぞ見られませんでした。両方の言い分を足して二で割るといった、悪しき政治力で対応するというよりも、筋を通して誠実に対処するというのが、讃岐先生の基本原理でした。大学には、大学の論理と倫理とがあるというのが、ご信条のようです。ですから、時に愚直にすぎると印象を与えることもありましたが、決して筋を違えないという態度には、活動家の学生も一目置いておりました。

時を経て、かつての活動家の学生と三鷹や吉祥寺界限で落ち合って、気持ちよく杯を上げることができるということは、讃岐先生の特技でしょう。そして、現在でも平静につきあえるというのは、大学の紛争期にあっても、便法を排し、常に毅然とした対応への尊敬があつてのことだと思えます。当時、「造反有理」と学生に同調し、結果として将来を誤らせた教師ではこうはいかないでしょう。紛争時には、教師対学生、教師対教師、学生対学生、それぞれの事情があつてのことですが、人間どうしの間で裏切りに類するような行為も見られました。危機的な状況になりますと、人間的な弱さも現れれば、同僚や友人に対して不信感を抱くこともありました。こんな状況にあつて、讃岐先生は、どんなことが起こっても、信頼できる教師であり、同僚でした。誠実そのものの方でしたから、ご一緒していて安心できました。大学紛争の時期を過ぎて、ともすれば人間への不信に陥りそうな中で、讃岐先生の存在は、私にとって人間の信頼への希望を繋げるものでした。得難い先輩を有り難く思い、常に感謝しております。

讃岐先生については、「誠実さ」の他にも、幾つかのキーワードがあります。「世話好き」、「まめ」、「几帳面」、「義理堅さ」などを挙げるができます。この一つ一つについて記すと、大作の「ヒューマン・コメディ」が描け

そうですが、残念ながら私にはその能力がありません。

先生の無類の世話好きについて、教育研究所や教育学科の人間は、それぞれに思い当たることが多いと思います。たいていの同僚や学生は、ドイツ語を勉強しましょう、ラテン語を勉強しましょう、と誘われたはずです。私自身は、讃岐先生の語学の講習を受けたことは遂にありませんでしたが、ドイツ語速修講習を受けた学生によると、これをきっかけにして、語学の勉強に興味を持つようになったということでした。ドイツ語入門で手ほどぎを受けた学生の中には、現在では他大学で教育原理を担当する教師も出てきております。教育研究所に中国からの研究生を受け入れたときに、親身になって面倒を見て下さったのも先生でした。わが国の教育事情を少しでも多く見る機会をとというわけで、筑波大学へも、放送教育開発センターへも、ご自分の車でお連れになっていました。こういうことは、世話好きで、まめでなければできません。

先生の几帳面さは、教育関係法規や、大学の諸規則にも十分な注意を向けるという姿勢となります。教師には、法規や規則を念頭におくというような面倒なことは御免という気分があるのですが、マメでいらっしゃることとあいまって、法規や規則に関する造詣の深さは、同僚の等しく認めるところです。規則や手続で不明なところがあると、讃岐さんに聞こうというのが常でした。文部省関係の資料や大学の会議の資料が必要なときは、先生に相談すれば、たいてい解決というわけです。教授会関係規則である現在の「ファカルティ・マニュアル」の整理と改正は、先生のおでした。教養学部教育学科でも、大学院教育学研究科でも、科長ご在任中は、事務の機械化に努められたばかりでなく、記録の方法と形式、ファイル・システムなどを完成されました。現在行われている方式のほとんどすべては、先生の整理になるものです。

ご専門の分野に関して私をご紹介するのは当を得ていないことは自覚しておりますが、私の側から推察させて頂ければ、ICUご在任中に、ドイツ哲学の専門家から、アメリカの教育学へと興味を移されたように思われます。

初期のお仕事では、キェルケゴール、ハイデッカーなどを取り上げられていました。その後、ハーバード大学へ留学されてから、1960年代の前半頃から、俄然、デューイ、ガードナーなどを中心とするアメリカの教育学に興味を向けられるようになります。現在までも続けておられる、大学教育の改善や、一般教育の吟味に関するお仕事は、その頃にその基盤をお作りになったことと思われます。J. W. ガードナー『優秀生』の翻訳のお仕事は、これが名訳であったばかりでなく、このお仕事を通して、学術にたずさわるものの「誠実性」の必要なることを体得なさったことと推測しております。

讃岐先生の在外研究では、ハーバード大学大学院で、修士課程を履修されました。旧制大学を卒業になった先生方に見られることですが、在外研究の機会では、「某大学を訪問した」、「某有名教授に会った」、「某研究所で講義をした」などに関心を向ける方が多い中で、讃岐先生のような方は珍しいと思います。アメリカの大学院学生ほどではないにしても、課程履修には語学力は必須ですし、努力も必要です。それこそ、自分の仕事に誠実でなければ、やり遂げることはできません。おそらく、ハーバードでのご経験は、後の研究に資することが多かったように思われます。東京大学卒の哲学徒が、標準偏差だとか、t検定といった語彙を駆使されるようになったのですから。

教育という学問が、とりわけ実際的な学問であるという性格もあって、先生は実社会での教育活動とも密接な関係をお持ちでした。10数年に及ぶ文部省一般教育視学委員会委員、三鷹市教育委員、社会教育委員など、通常の大学のお仕事に加えてお務めになりました。大学内でも、数次に渡る教育課程の主任や、生涯教育プログラム主任など、手間のかかるお仕事に努められました。もちろん、所属学会の役員としてのお仕事も多くありました。それぞれのお仕事を適当に手を抜いてということの出来ないご性格ですので、お疲れになったことと思われます。これら諸々の労にお報いするために、国際基督教大学より1992年3月に名誉教授の称号を受けることになりました。

讃岐先生は、ほぼ大学創立期からの方でした。先生のご退職で、古き良きICUのなにかが、また一つ消えたという感懐を強く持ちます。今度は、名

古屋の地で、新しい、そして清新な学園造りに取りかかれることになりました。わが国の高等教育の世界が、この誠実の人を必要としているわけです。ICUからご退職になっても、お仕事からの引退は、まだまだ先のようです。今はただ、先生のご健康を祈るばかりです。

讃岐和家教授略歴ならびに主要業績

[略 歴]

- 1926年 7月 6日 東京府荏原郡駒沢新町に生まれる
- 1951年 3月 東京大学文学部哲学科卒業，文学士
- 1951年 4月～54年 3月 東京大学大学院（旧制）に在学，倫理学を専攻
- 1954年 4月 国際基督教大学教育研究所助手
- 1955年 4月 国際基督教大学教養学部社会科学科専任講師
（教育哲学担当）
- 1960年 4月 国際基督教大学教養学部社会科学科助教授
（教育哲学担当）
- 1961年 9月～63年 8月 国際基督教大学教養学部社会科学科を休職，内外協
力会の奨学金により米国ハーヴァード大学文理学大
学院および教育学大学院に留学
63年 6月，Master of Educationの学位を受ける
- 1963年 9月 国際基督教大学教養学部教育学科に復職
（62年 4月に教養学部教育学科が新設され，移籍さ
れたため）
- 1966年 4月 国際基督教大学学生部長
- 1967年 6月 国際基督教大学学生部長を辞任（学長退任のため）
- 1969年 10月 国際基督教大学教養学部教育学科長および教育研究
所長代理
- 1969年 10月 国際基督教大学学長補佐
- 1970年 4月 国際基督教大学教養学部教育学科教授（教育哲学担
当）
- 1970年 5月 国際基督教大学学長補佐任期満了

- 1970年10月 国際基督教大学教養学部教育学科長および教育研究所長代理任期満了
- 1972年3月 国際基督教大学学生部長任期満了
- 1974年4月 国際基督教大学大学院教育学研究科長および教育学専攻科長
- 1976年3月 国際基督教大学大学院教育学研究科長および教育学専攻科長任期満了
- 1977年4月 国際基督教大学教養学部教育学科長
- 1977年4月 国際基督教大学教職課程プログラム主任
- 1980年3月 国際基督教大学教養学部教育学科長任期満了
- 1980年3月 国際基督教大学教職課程プログラム主任任期満了
- 1982年4月 国際基督教大学大学院教育学研究科長および教育学専攻科長
- 1982年4月 国際基督教大学教職課程プログラム主任
- 1984年3月 国際基督教大学教職課程プログラム主任任期満了
- 1987年8月 国際基督教大学大学院教育学研究科長および教育学専攻科長任期満了
- 1989年9月 国際基督教大学生涯教育プログラム主任
- 1990年4月 国際基督教大学教養学部教育学科長
- 1992年3月 国際基督教大学生涯教育プログラム主任任期満了
- 1992年3月 国際基督教大学教養学部教育学科長任期満了
- 1992年3月 国際基督教大学を定年退職。92年4月1日付けで学校法人国際基督教大学より国際基督教大学名誉教授の称号を受ける

この間、1970年12月より73年3月まで文部省筑波新大学創設準備委員会専門委員、1977年6月より91年3月まで一般教育視学委員、1983年10月より91年9

月まで三鷹市教育委員、民主教育協会学生生活セミナー実行委員会委員、キリスト教学校教育同盟キリスト教学校教師養成事業委員会委員、全国私立学校教職課程研究連絡協議会事務局長、一般教育学会事務局長、日本学術会議教育学研究連絡委員会委員等を歴任

[著 書]

1. 教育思想史叙説，葵書房，1970年（金沢勝男他3氏と共書）
2. アメリカ教育哲学の展望，清水弘文堂，1981年（杉浦宏氏他10氏と共著）
3. キリスト教学校の教育，キリスト教学校教育同盟，1987年（松川成夫他7氏と共著）

[訳 書]

1. J. W. ガードナー著『優秀性』，理想社，1969年

[論 文]

1. キェルケゴールにおける倫理性の問題，「倫理学年報 第2集」，日本倫理学会，1953年
2. キェルケゴールの生涯（上），（中），（下），「キリスト教常識」，キリスト教常識社，1953年9月号，10月号，12月号
3. ハイデッカーのプラトン哲学観，「実存 No.7」，理想社，1955年
4. ペスタロッチ，古川哲史編『人間の教師』所収，大阪図書，1958年
5. 西洋近代の道德教育，『道德教育講座別巻』，角川書店，1958年
6. フレーベルにおける教育哲学の諸原理，「教育研究 No.6」，国際基督教大学，1960
7. デューイの教育目的論，「教育研究 No.10」，国際基督教大学，1963年

8. アメリカの青年達, 「理想 No.403」, 理想社, 1966年
9. J. W. ガードナーにおける社会哲学と教育の問題, 「教育研究 No. 13」, 国際基督教大学, 1968
10. アメリカの大学, 「理想 No.450」, 理想社, 1970
11. 私大にみる一般教育, 「I D E No.145」, 民主教育協会, 1974
12. 教育と実存, 「実存主義 No.70」, 以文社, 1974
13. 国際基督教大学教養学部の四半世紀, 「I D E No.177」, 民主教育協会, 1977
14. 教育学の科学性について, 「教育研究 No.25」, 国際基督教大学, 1979
15. 宗教的情操の育成について, 「道徳と教育 No.214」, 日本道徳教育学会, 1979
16. アメリカにおける伝統主義の教育哲学, 「教育研究 No.23」, 国際基督教大学, 1980
17. デューイの経験の独自性——教育論の立場から——, 「日本デューイ学会紀要 第21号」, 1980
18. Relevancy of the Community Needs, in “The Pursuit of Excellence in Higher Education”, edited by Ilhi Synn, Keimyng University, Daegu, Korea, 1980
19. 学校における知育と徳育, 「道徳と教育 No.225」, 日本道徳教育学会, 1981
20. 現代日本における教職観の一考察, 「教育研究 No.24」, 国際基督教大学, 1982
21. キリスト教に基づく価値教育の哲学的基礎, 『価値教育』所収, 日本YMC A研究所, 1982
22. 児童・生徒における道徳性の発達, 「信濃教育 No.1154」, 信濃教育会, 1983
23. アメリカの教員養成改革の歴史と最近の動向, 「大学時報 第175号」, 日本私立大学連盟, 1984

24. 国際化社会における教育課題の視点と展望, 「教育学研究 第51巻 第3号」, 日本教育学会, 1984
25. アメリカの大学における一般教育の歴史, 「大学時報 第180号」, 日本私立大学連盟, 1985
26. 今日の大学における教育方法改善の課題, 「大学研究 第5号」, 筑波大学・大学研究センター, 1989
27. 単位制の空洞化を克服する方策——学生の学習の充実改善に向けて——, 『大学教育改善の方法に関する研究——Faculty Developmentの観点から——』所収, 広島大学・大学教育研究センター, 1990
28. 単位制度問題と一般教育, 「大学基準協会会報 第64号」, 大学基準協会, 1990
29. 授業時間と単位, 「I D E No.315」, 民主教育協会, 1990
30. 日米両国の四年制大学における単位制度の比較に関する研究, 「教育研究 No.33」, 国際基督教大学, 1991
31. キリスト教教育の価値論的枠組みと礼拝の問題, 『キリスト教学校教育の理念と課題』所収, キリスト教学校教育同盟, 1991
32. 高等教育の改革課題——一般教育をめぐる——, 「教育学研究 第59巻 第1号」, 日本教育学会, 1992

[報告書]

1. 国際基督教大学大学院の事例研究, 「大学院の研究——その2——」所収, 国立教育研究所, 1979
2. 和辻哲郎とキリスト教, 「西洋倫理思想の日本における受容の研究」所収, 昭和53年度科学研究費補助金・総合研究(A)・研究成果報告書(課題番号231013), 1980
3. 道徳教育における宗教教育の意義, 「道徳教育における宗教教育の意義に関する基礎的研究——日独米を中心に——」所収, 昭和61・62年度科学研究費補助金・一般研究B 研究成果報告書(課題番号61450039), 1988

4. 日本におけるキリスト教主義学校における宗教教育と道德教育, 「道德教育における宗教教育の意義に関する基礎的研究——日独米を中心に——」所収, 昭和61・62年度科学研究費補助金・一般研究B・研究成果報告書(課題番号61450039), 1988

[その他]

弘文堂刊『新倫理学事典』(1957年初版, 1969年改定版)に「新約聖書の倫理思想」, 「弁証法神学の倫理思想」, 「家族」, 「教育学・教育哲学・教育科学」, 「宗教性」, および「近代西洋の道德教育」を, 第一法規刊行の『新教育学事典』(1990年)に「エッセンシャルリズム」を寄稿した。他に, 文献紹介および書評等約10点がある。